



○ 不器用

この KOCHO だよりは校内のことを自分の目で見てよいところを取り上げて記述するというのが基本ですが、ときどき話題を新聞記事や本などから引用することもあります。今回は朝日新聞の折々のことばと天声人語に、私が学生たちに伝えたいことと共通する内容がありましたので引用して見ます。

私の頭はあまり切れませんが、どちらかというと器用な方だと思います。しかし記事に記述されているように、私は美術を学びましたが、作家にはなれていません。器用な部分が災いしていると、いつも思います。しかし義務教育の分野ではある程度器用でないと務まらない場面もあります。部活動の顧問（特に運動部）はみんなが専門分野を担当できるわけではありません。多くの先生は素人の状況から学んで“監督”になっていきます。小学校では担任の先生がほぼ全ての教科の授業を担当します。文系・理系とは言ってられません。ということで私の人生では器用さも少しは役立ってきたようです。

器用が邪魔になることを「器用貧乏」と表現しますね。本校の学生たちは食を職業にしようとしています。包丁の扱いなどは習熟した方がいいですが、不器用でもいいと思います。自分は不器用で鈍感な人間だとマイナスに考えている人もいるかも知れません。しかし、不器用な人が一つの道を究めたら、こんなに強いことはありません。器用な人よりも立派な仕事をするのでしょ。自信をもって誠実に学んでほしいと思います。ただ、1年間は短いな……。その後のことも見通してあせらずに学び続けましょう。

竹の話題が取り上げられました。私は竹という素材が好きです。趣味（本職？）でかごを編むのが好きな私ですが、竹で編まれたかごなど丁寧に作られたものは一生ものとして使えます。使えば使うほど味わいも増してきます。竹の話題から編集者の方の仕事への取組が紹介されています。食を扱う仕事に就いた場合はどうでしょう。自分が調理したものを食していただく方のことを想像することが大切ではないでしょうか。どんな仕事でも想像力（創造も）は大切です。

最後に、「～なれるだろうかと不安を覚えるかもしれない。」とあります。まさに今年入学した人たちは今このような気持ちではないでしょうか。初めはみんなそうです。がんばれ！

折々のことば 鷲田 清一 2346

頭が切れたり、器用な人より、ちょっと鈍感で誠実なの方がよろしいですね。

西岡常一

器用な人は苦もなく先に進んでゆけるので、往々にして「本当のものをつかまぬうちに」作業を終えてしまう。反対に不器用な人は「とことんやらぬ」と得心がでないから、要所を疎かにせずに熟達すると、奈良の宮大工は言う。画家の場合だとたしかに、手がそつなく動く、その器用さを不自由と感じ、あえて利き手とは逆の手で筆を持つ人がいる。「木に学べ」から。

2022・4・10

天声人語

竹のおもしろみは、季節にあらうようなところにある。秋に草木が色づく頃には青々として、自分だけ春の装いとなる。やや場違いなその様子は「竹の春」と呼ばれ、季節にもなっている。そして今の春の季節は「竹の秋」である▼葉が黄色くなるのは、勢いよく伸びるタケノコに養分を回しているかららしい。自らは秋に身を置き、若い仲間たちに春をもたらす。次の世代への思いやりにも見える▼ときに優しく、ときに厳しく。次世代をどう育てるかが問われる季節である。あちこちの職場で、新たに入社した人たちが、異動で新たな仕事を始める人たちの姿がある。新人研修でも実地の訓練でも、すでに育った竹たちの出番である▼かなり昔になるが、学校を出て最初に入った出版社の研修で聞いた話がある。講師役は、少女向け雑誌に長く携わったベテラン編集者だった。子どもがいなかったその人は、読者の気持ちに少しでも近づこうと、自分のなかで架空の少女を思い描いていた▼少女に名前をつけ、あの子はいま学校に行っているかな、友だちと遊んでいるかな、などといった想像していたと話してくれた。学んだのは、雑誌を手にとってくれる人を常に考える姿勢である。どんな製品、サービスでも同じであろう▼タケノコたちは、背の高くしなやかな竹に出会い、あの人のようになれるだろうかと不安を覚えるかもしれない。しかし誰でもタケノコの時代は悩みながら過ごしたはずだ。誰かから養分を受け取りながら。

2022・4・10

○ 自校自賛

学生たちは私服で登校します。通常の若者の姿です。実習服に着替えた途端凛々しく見えます。特に私には！

